

「教育臨床総合研究21 2022研究」

## 読み聞かせ場面における絵本の内容が子どもに与える影響

— 年齢差による反応に着目して —

Influence of Picture Book Content on Infants in Reading and Listening Situations

— Focusing on developmental stage-specific responses —

中 川 香 澄\* 伊 藤 優\*\*

Kasumi NAKAGAWA Yu ITO

### 要 旨

本研究では、絵本の内容による子どもの発話や行動、繰り返しの読み聞かせで生じる子どもの反応の変化を年齢別に検討した。発話と行動のチェックシートを作成し、4歳児・5歳児に絵本を読みかかせた時の発話と行動の回数をもとに年齢、本の内容、読み聞かせ時期の関係を分析した。その結果、絵本の内容によって子どもは異なる反応を示し、年齢差や読み聞かせ時の環境、生活背景等も子どもの反応に影響することが示唆された。

〔キーワード〕 絵本、幼稚園、読み聞かせ、子どもの反応

### I 研究の目的と方法

子どもは取り巻く環境の中で絵本と出会う。絵本に出会い、ともに寄り添う大人に繰り返し読んでもらい、絵本の内容に心を動かされる経験を通して情操を豊かにする。そして、自己の確立期と重なる発達の中、自分で絵本の絵を楽しむこと、自分で絵本を読むことを通して絵本の言葉や内容を内在化し、新しい言葉を獲得していく。平成30年度施行の幼稚園教育要領でも示されているように、絵本の読み聞かせは子どもの情操を豊かにし、友達や保育者と心を通わせること、言語獲得、三項関係の成立等、子どもの発達に影響を与える。そのため、絵本の読み聞かせに関して様々な先行研究がなされている。

絵本に関する先行研究では、幼稚園の入園年齢のクラスにおいて絵本の読み聞かせの構成や保育者の動作および発話が幼児の発話に与える影響を検討した研究（並木，2012）や、保育を作り出す主体である保育者の観点からの研究（横山・水野，2008）が行われている。また、熟達した保育者と保育者志望の学生との読み聞かせの比較から、熟達した保育者には子ども達が安心して絵本を楽しめるような視線や間のとりかた、表情に特徴があるという研究（中楯・山内，2016）もある。このように、読み聞かせ場面における子どもの特徴を捉えつつも、保育者

\*株式会社キタムラ

\*\*島根大学教育学部

の読み聞かせの方法や、保育者が読み聞かせ時に留意すること等、「保育者」が主体となった先行研究は多く存在するが、絵本の内容による子どもの反応に関する先行研究は少ない。

松村・杉・宇陀（2008）の研究で子どもごとに好きな絵本に対する反応が異なると示されていることから、保育者の読み方だけでなく、絵本の内容そのものからも子どもは影響を受けていることが明らかにされている。しかし、どのような絵本が子どもにどのように影響を与えるか等、絵本の内容そのものや聞き手である子どもが受けている影響、同じ絵本を何度も読み聞かせることがどのように影響を与えるかについては明らかにされていない。

そこで本研究では、絵本の内容による発話と行動それぞれの反応の違いや、学期をまたいで繰り返し読み聞かせることで生じる反応の変化を年齢別に明らかにする。これを行うことで、児童文化財として絵本が保育の中でどのように活用できるかを明示し、絵本を選定する際の新たな視点を示唆することが可能になると考えられる。

なお、本研究では取り扱うテーマや主人公によって内容が区別される食育絵本を用いて観察を行う。食育絵本とは主となるテーマが「食育」に置かれ、食に関する教育的意義をもった絵本のことである。食育とは生きる上での基本であり、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を育てることが期待される食材・食習慣・栄養等、食に関する教育の事であり、単純に「ご飯を食べます」という様な内容ではなく、「何のために食べるのか」、「誰と食べるのか」、「何を食べるのか」、「食べたらどうなるのか」と教育的意義をもつものと記されている。（文部科学省；内閣府食育推進室；農林水産省，2005）食育絵本は上記の様に内容による分類が容易で、子どもが日常生活において必ず触れている事柄でイメージしやすく、子どもの反応を得やすいと考えられるため、本研究では食育絵本に焦点を当てて行う。

## II 研究方法

### 1. 調査期間

本観察は2021年7月15日から10月25日の間、それぞれの観察は約40日の間隔をあけて行う。それぞれの観察日と読み聞かせを行った絵本は以下の表1の通りである。

表1 読み聞かせを行う絵本と観察を行った日程

絵本／回数	1回目	2回目	3回目
①食材と人間との関わり・栽培	7月15日	9月2日	10月20日
②食べ物と健康	7月16日	9月3日	10月21日
③食材そのもの	7月19日	9月6日	10月22日
④食を通じた人間関係・文化や習慣	7月20日	9月7日	10月25日

## 2. 調査対象

観察対象者は、F幼稚園の4歳児（ことり組）27名と、5歳児（そら組）25名の計52名である。観察は観察対象園の副園長先生を通じて依頼し、園児の保護者にも観察の許可を得た。

## 3. 調査方法

### (1) 食育絵本の分類

先述した通り、本研究では食育絵本を用いて観察を行う。観察にあたって堤ら（2008）の研究を基に、①食材と人間との関わり・栽培、②食べ物と健康、③食材そのもの、④食を通じた人間関係・文化や習慣の4つに分類し、それぞれの分類に当てはまる絵本を以下のように選定した。

①食材と人間との関わり・栽培：『ハナちゃんのトマト』（市川里美，2013）

②食べ物と健康：『たべもののたび』（かこさとし，2020）

③食材そのもの：『まほうのおまめだいずのたび』（松野春野・辰巳芳子，2020）

④食を通じた人間関係・文化や習慣：『うちのコロッケ』（谷口國博・村上康成，2018）

これらの絵本は、まだ観察対象園では読み聞かせを行っていない絵本である。

### (2) 事前調査

絵本の読み聞かせ時における幼児の発話や行動について、何がどの程度現れるのかを手がかりにするため、2020年12月から2021年3月の間にF幼稚園での読み聞かせ時の子どもの様子を観察し、現れた発話と行動、並木（2012）の研究を基に発話と行動のチェックシートを作成した。また、作成したチェックシートの有用性を検討するため、2021年4月から6月の間に複数回予備観察を行い、加筆・修正を行った。

表2は発話の分類、表3は行動の分類を示す。

表2 発話の分類

発話の種類	カテゴリー	定義	例	
読み聞かせ時の発話	絵本そのものへの発話	笑い	「うわー!」などの感嘆詞や声に出して笑う。	「うわー!」、「えー!」、「すごい」、「ふふ」、「あはは」
		否定	絵本に対する否定的な発言をする。	「見ない」、「やだ」、「嫌い」
		絵へのコメント	絵について発言する。	「後ろに誰がいる」、「あそこに〇〇がある」
		お話へのコメント	ストーリーについて発言する。	「〇〇しちゃってる」、「たしかに〇〇してる」
		疑問	質問する。	「え?」「〇〇は?」「そうなの?」
		推測・先取り	話の展開を予想した発話や、内容を先に言う。	「〇〇しようよ」「たぶんね〇〇するんだよ」「このあとこうなるよ」
	経験	「知ってる」、「見たことある」、「自分さこうした」等、自分の経験を発言する。	「読んでたことあるよ」「知ってる」	
	復唱	セリフを繰り返す、真似をして同じ言葉を言う。	「はあー」「シカ!」	
	読み手に対する発話	読み手に対する発言。	「聞こえない」「見えない!」「読ま!」	
	他児に対する発話	他児に対する発言。	「そうだよ」「ちがうよ」「ね!」	
読後の発話	絵本の読み聞かせから次の活動に移行するまでの発話。	「〇〇したとこあった」「驚かしてる!」「もう終わり?」「はいー!」		

表3 行動の分類

行動の種類	定義	例
指差し	絵本に向かって指差しをする	
立つ	立ち上がるだけでその場から離れず、その場に再び座る。	「しゃべーっ!」という登場人物のセリフに合わせて、子どもが立ち上がる。その場を離れることはなく、立ったまま話を聞きまわく、再びその場に座る。
移動	座っている位置から移動する。	「しゃべーっ!」という登場人物のセリフに合わせて立ち上がり、その場から離れようとする。離れる。座った位置からお尻を付けたままずるずると移動する。
座り方を要する	座り方を要する。	絵本の方に顔を向けたまま、お山座りから正座、膝立ちなどに座り方を要する。
手遊び	手遊びをしたり、自分の両手で遊んだりする。	水筒のストラップをいじったり、製作物で遊んだりする。
他児にちよっかいを出す	膝しかけたり、顔を寄せたりする。	絵本の内容に関わらず、他児に膝しかけたり手や足に触れたりする。
首を立てる	手を叩いたり、足を踏み鳴らしたりする。	絵本の内容に関わらず、拍手をしたり、膝裏で足をたたいたり、足を踏み鳴らしたりする。

### (3) 本調査

観察時間は、降園前の30分間で、観察場所は4歳児、5歳児それぞれの保育室内で行った。本調査では、予備観察で作成したチェックシートに加え、ビデオカメラも併用し、観察者の筆記だけでは拾いきれない子どもの発言を拾い、子どもの行動を定点で記録した。また、本研究では絵本の内容の違いによる子どもの反応の差を明らかにするため、読み方に関する条件を伝え保育者によって読み方に差が出ないように配慮した。

#### 4. 分析方法

観察後、発話と行動の回数を整理、分類したものを基にクロス表を作成する。作成した表を基に実測値の割合を算出し、反応の差異を分析する。

#### 5. 倫理的配慮

研究の趣旨を書面にて説明した。また、得られた結果は研究以外の目的では使用しないこと、幼稚園の情報や観察対象者のプライバシーは厳守されること、観察への協力は任意であり、協力の有無により幼稚園や個人に不利益は被らないことを説明した。観察は幼稚園内のみで行い、観察に用いたチェックシートやビデオカメラ、記録用SDカードは施錠可能な場所に保管し、データ管理を徹底した。

### III 結果と考察

分析を基に、「絵本」、「年齢」、「読み聞かせを行う時期」の3つの観点に対する子どもの反応の実測値のクロス集計を基に、それぞれの反応の違いの分析・検討を行う。

#### 1. 絵本の内容と年齢の関係

まず、絵本の内容と年齢の関係を表4に示す。表4の左側は発話、右側は行動である。

表4 「食材と人間との関わり・栽培」における4歳児と5歳児の反応数

食べ物と人間との関わり									
栽培									
発話	4歳児(回)	%	5歳児(回)	%	行動	4歳児(回)	%	5歳児(回)	%
笑い	28	26.9	5	4.7	指差し	10	6.5	2	1.6
否定	1	1.0	0	0.0	立つ	2	1.3	2	1.6
絵へのコメント	13	12.5	17	16.0	移動	14	9.1	34	27.0
お話へのコメント	11	10.6	16	15.1	座り方を変える	62	40.3	45	35.7
疑問	6	5.8	7	6.6	手遊び	20	13.0	10	7.9
推測・先取り	0	0.0	1	0.9	他児にちょっかいを出す	23	14.9	33	26.2
経験	11	10.6	18	17.0	音を立てる	23	14.9	0	0.0
復唱	10	9.6	14	13.2					
読み手に対する発話	13	12.5	11	10.4					
他児に対する発話	6	5.8	3	2.8					
読後の発話	5	4.8	14	13.2					
合計	104	100.0	106	100.0	合計	154	100.0	126	100.0

表4より「食材と人間との関わり・栽培」の絵本における4歳児の発話は、「笑い」(26.9%)や「絵へのコメント」(12.5%)、「読み手に対する発話」(12.5%)等、読み聞かせを聞いている即自的な発話や自身の気持ちを表現する発話、見たこと聞いたことに対する発話が多かった。しかし、5歳児の発話は、「笑い」(4.7%)が少なく「経験」(17.0%)や「絵へのコメント」(16.0%)「お話へのコメント」(15.1%)等絵本で見たこと聞いたことだけではなく、「アイコってトマトがあるよ」と自身の経験や体験と絵本の内容を結び付ける発話が多かった。「食材と人間との関わり・栽培」は、実際に食べ物と関わる際に起こりうる事柄や事実を交えて物語が展開される(堤ら, 2008)ため、実体験や経験と絵本の内容が結びつきやすいことが推察される。「コメント」は、古屋ら(2000)の研究において、子どもたちが登場人物に対する認知的理解を行っている一つの指標となることが述べられている。また、栽培をテーマとしているた

め、5歳児において「トマト育てたことある」と、物語の展開の軸である栽培に対する発話が子どもの経験に基づく根拠を伴って出現した。

表4より行動に関して、4歳児、5歳児共に「座り方を変える」が多く出現（4歳児：40.3%，5歳児：35.7%）した。森光・藤原（2011）が自身の研究において「自由視聴座席形態は、集中しやすいがネガティブな態度をとりやすい環境である」ことが示されており、座席形態による影響が大きいことが示唆された。5歳児においても座席形態の影響は認められるが「他児にちょっかいを出す」（26.2%）も多く出現している。近藤・辻本（2007）の研究において、「隣の子と話し合ったり、2人で笑いあったり、うなずきあったり等、友達を意識した姿が見られる」ことが明らかになっており、5歳児の行動の特徴であると推察される。

表5 「食べ物と健康」における4歳児と5歳児の反応数

食べ物と健康									
発語	4歳児(回)	%	5歳児(回)	%	行動	4歳児(回)	%	5歳児(回)	%
笑い	22	11.5	13	7.7	指差し	3	1.9	11	7.1
否定	1	0.5	0	0.0	立つ	5	3.2	1	0.6
絵へのコメント	5	2.6	23	13.7	移動	11	7.1	25	16.2
お話へのコメント	79	41.1	72	42.9	座り方を変える	74	47.4	52	33.8
疑問	14	7.3	4	2.4	手遊び	12	7.7	21	13.6
推測・先取り	13	6.8	6	3.6	他児にちょっかいを出す	32	20.5	35	22.7
経験	8	4.2	11	6.5	音を立てる	19	12.2	9	5.8
復唱	17	8.9	19	11.3					
読み手に対する発語	15	7.8	5	3.0					
他児に対する発語	13	6.8	8	4.8					
読後の発語	5	2.6	7	4.2					
合計	192	100.0	168	100.0	合計	156	100.0	154	100.0

表5より、「食べ物と健康」における4歳児の発話は、読み聞かせを聞いての即時的な反応や、自身の感情を表す「笑い」（11.5%）や「お話へのコメント」（41.1%）が多く出現し、「胃でどろどろになる」等物語の内容に理解を示している姿が示唆された。5歳児の発話も4歳児と同様に、「お話へのコメント」（42.9%）の発話が多く、物語の内容に理解を示していることが推察される。「食べ物と健康」は栄養素の体内での働きや健康との関係を取り上げている（堤ら,2008）ため、経験の差に左右されることが少なく、読み手がどれだけ知識を持っているか、話の内容が理解できるかが影響するのではないかと推察される。

表5より行動に関して、4歳児、5歳児共に「座り方を変える」（4歳児：47.4%，5歳児：33.8%）が最も多く出現し、座席形態の影響を受けていることが推察される。次いで「他児にちょっかいを出す」（4歳児：20.5%，5歳児：22.7%）が多く出現していることから、周囲の友達と関わり、楽しみながら読み聞かせを聞いていることが示唆された。

表6 「食材そのもの」における4歳児と5歳児の反応数

食材そのもの									
発語	4歳児(回)	%	5歳児(回)	%	行動	4歳児(回)	%	5歳児(回)	%
笑い	9	7.5	7	5.8	指差し	31	17.1	31	16.5
否定	1	0.8	0	0.0	立つ	3	1.7	4	2.1
絵へのコメント	31	25.8	38	31.7	移動	26	14.4	31	16.5
お話へのコメント	16	13.3	15	12.5	座り方を変える	69	38.1	40	21.3
疑問	3	2.5	9	7.5	手遊び	16	8.8	25	13.3
推測・先取り	0	0	2	1.7	他児にちよっかいを出す	22	12.2	50	26.6
経験	19	15.8	8	6.7	音を立てる	14	7.7	7	3.7
復唱	18	15	9	7.5					
読み手に対する発語	7	5.8	8	6.7					
他児に対する発語	8	6.7	12	10.0					
読後の発語	8	6.7	12	10.0					
合計	120	100.0	120	100.0	合計	181	100.0	188	100.0

表6より、「食材そのもの」における4歳児の発話は、「絵へのコメント(25.8%)や「経験(15.8%)が多く、「お味噌汁朝飲んだよ」と物語の内容に理解を示し、自身の経験と結びつけながら読み聞かせを楽しんでいることが推察される。5歳児の発話では、「絵へのコメント(31.7%)や他児への発話が多く出現し、周囲の友達とともに読み聞かせを楽しむ5歳児の特徴が示唆された。「食材そのもの」には、栄養素や人間との関わり等食材に付随する情報まで含まれている(堤ら, 2008)ため、聞き手の経験や体験、知識、年齢の違いによって、様々な反応が得られたのではないかと推察される。また、読み聞かせを静かに聞いているが、具体的な食品が出てきた際には、「今日食べたよ」と自分の経験に基づいた発話が出現した。レシピ本と違い、食材が食べ物に変化するまでの過程を丁寧に追っているわけではないため、「大豆なの?」、「枯れたら大豆になるの?」と話の軸である大豆の成長や食材の変化については疑問を抱く子どもが多かった。

表6より行動に関して、4・5歳児共に「座り方を変える(4歳児:38.1%, 5歳児:21.3%)が多く出現しており、座席形態の影響を受けていることが示唆された。しかし、5歳児においては「他児にちよっかいを出す(26.6%)が最も多く出現していることから、周囲の友達との関わりを促進させるような内容であることが推察される。

表7 「食を通じた人間関係・文化や習慣」における4歳児と5歳児の反応数

食を通じた人間関係 文化や習慣									
発語	4歳児(回)	%	5歳児(回)	%	行動	4歳児(回)	%	5歳児(回)	%
笑い	69	29.9	63	34.6	指差し	4	3.5	7	5.6
否定	4	1.7	3	1.6	立つ	8	7.0	5	4.0
絵へのコメント	12	5.2	37	20.3	移動	25	21.7	29	23.2
お話へのコメント	61	26.4	26	14.3	座り方を変える	44	38.3	35	28.0
疑問	11	4.8	2	1.1	手遊び	4	3.5	14	11.2
推測・先取り	0	0.0	4	2.2	他児にちよっかいを出す	24	20.9	32	25.6
経験	4	1.7	7	3.8	音を立てる	6	5.2	3	2.4
復唱	32	13.9	17	9.3					
読み手に対する発語	12	5.2	2	1.1					
他児に対する発語	4	1.7	10	5.5					
読後の発語	22	9.5	11	6.0					
合計	231	100.0	182	100.0	合計	115	100.0	125	100.0

表7より、「食を通じた人間関係・文化や習慣」における4歳児の発話は、「笑い」(29.9%)や「お話へのコメント」(26.4%)が多く、楽しみながら物語の内容を理解している姿が推察される。5歳児の発話においても「笑い」(34.6%)の発話が多かった。「食を通じた人間関係・文化や習慣」では、食材や食べ物だけでなく人との関わり合いが物語の中の軸になることもある(堤ら,2008)ため、登場人物が物語理解の手掛かりになったと推察される。4・5歳児共に「笑い」の発話が特に多く出現している。原坂(1997)の研究において、幼児の笑いは「その幼児にとって、そこが快適で安心な空間・時間であること」が発生の条件になると述べていることから、初めて出会う絵本でも、食卓の雰囲気やイメージ等から安心感を得ることができ、「笑い」に繋がったのではないかと推察される。

表7より行動に関して、4・5歳児共に「座り方を変える」(4歳児:38.3%, 5歳児:28.0%)が多く出現しており、ここでも座席形態の影響を受けていることが示唆された。

表4から表7の分析を踏まえ、発話では、4歳児は物語を楽しむ姿が直接的に読み取れる「笑い」、絵本の内容を聞いて理解する「お話へのコメント」等の発話が多く出現した。弓野・岩岡(1992)の研究において、「年齢が低くなるほど持っている概念の数が少ないため、物語を聞いたその場の記憶(短期記憶)に頼って発話する」と述べられており、読み聞かせ場面において、絵本の内容に即時的反応を示すという特徴から得られた結果であると推察される。

5歳児は、絵本の内容を理解する「絵へのコメント」、「お話へのコメント」、絵本の内容を自身の経験や体験と結び付けながら楽しむ姿が読み取れる「経験」の発話がどの種類の本においても多く出現した。山本(2008)の研究で、4歳児よりも5歳児の方が経験に基づくイメージを想起しやすいことが明らかにされていることに由来すると推察される。また、「笑い声」が4歳児よりも少なく、友定(1993)が「タブーに触れる『下品』な言葉での笑いは4歳児に多く見られ、その後減退すること」、「5歳になると、攻撃的な笑いはよくないと考えて抑制する子も現れるようになる」と述べていることに起因しているのではないかと推察され、実際の5歳児の観察でも笑う姿は少なかった。

以上の事から、4歳児の読み聞かせ時における発話において「食材と人間との関わり・栽培」、「食を通じた人間関係・文化や習慣」では「笑い」が、「食べ物と健康」、「食材そのもの」では「お話へのコメント」が多く出現し、特に「聞いて分かること」を中心に物語を理解しようとしていた。5歳児の読み聞かせ時における発話では、「経験」や「絵へのコメント」が絵本の種類に関わらず多く出現し、「見て分かること」からも物語を理解しようとしていた。また、絵本の内容を理解できるか、経験を想起できるかという年齢差による影響と、子どもが理解しやすい内容か、日常生活や園生活で経験がある内容かという絵本の要因が影響していることが示唆された。

行動に関して、4・5歳児共に読み聞かせ中の行動は、「座り方を変える」が多くの割合を占め、絵本ごとの違いはあまり見られなかった。しかし、森光・藤原(2011)が自身の研究において「自由視聴座席形態は、集中しやすいがネガティブな態度をとりやすい環境」であり、「特に年少児において顕著である」ことを明らかにしており、4歳児は座席形態による影響が大きいと推察される。5歳児においても座席形態の影響は認められるが、他児との関わりも多く出現しており、近藤・辻本(2007)の研究においても、「隣の子と話し合ったり、2人で笑

いあったり、うなずきあったり等、友達を意識した姿が見られる」ことが明らかになっている。観察においても、読み聞かせの最中に歩いたり移動したりする先には友達がいる、その子に話しかける姿や、話しかけることはなくても体を預けて絵本に集中している姿が見られた。

## 2. 絵本の内容と読み聞かせを行った時期と回数との関係

次に、絵本の内容と読み聞かせを行った時期と回数との関係を表8に示す。ここでは4歳児、5歳児と年齢によって区別せず、読み聞かせを行った時期や回数によって内容ごとに反応に違いが出るかを検討することで、絵本の内容そのものが子どもにどのような影響を与えるかを明らかにすることができる。表8の左側は発話、右側は行動である。

表8 「食材と人間との関わり・栽培」の時期ごとの反応数

食材と人間との関わり 栽培													
	7月(回)		9月(回)		10月(回)			7月(回)		9月(回)		10月(回)	
	回	%	回	%	回	%		回	%	回	%	回	%
笑い	2	3.6	6	13.6	25	22.7	指差し	3	2.5	7	7.8	2	2.9
否定	0	0.0	0	0.0	1	0.9	立つ	0	0.0	2	2.2	2	2.9
絵へのコメント	8	14.3	7	15.9	15	13.6	移動	21	17.5	9	10.0	18	25.7
お話しへのコメント	5	8.9	4	9.1	18	16.4	座り方を変える	42	35.0	42	46.7	23	32.9
疑問	7	12.5	1	2.3	5	4.5	手遊び	17	14.2	7	7.8	6	8.6
推測・先取り	1	1.8	0	0.0	0	0.0	他児にちよっかいを出す	30	25.0	11	12.2	15	21.4
経験	11	19.6	6	13.6	12	10.9	音を立てる	7	5.8	12	13.3	4	5.7
復唱	5	8.9	2	4.5	17	15.5							
読み手に対する発話	4	7.1	11	25.0	9	8.2							
他児に対する発話	2	3.6	1	2.3	6	5.5							
読後の発話	11	19.6	6	13.6	2	1.8							
合計	56	100.0	44	100.0	110	100.0	合計	120	100.0	90	100.0	70	100.0

表8から、発話に関して、「笑い」（7月：3.6%，9月：13.6%，10月：22.7%）や「お話しへのコメント」（7月：8.9%，9月：9.1%，10月：16.4%）等は7月から10月にかけて増加しており、「疑問」（7月：12.5%，9月：2.3%，10月：4.5%）や「読後の発話」（7月：19.6%，9月：13.6%，10月：1.8%）は徐々に減少していることから、繰り返し読み聞かせを行うことで、物語の内容理解が促進され、疑問が解消されていったことが示唆された。また、読み聞かせを繰り返す中で、自分のことについて話す、読み手に向けて話す、絵本の内容に注目すると発話の対象となる相手は変化していることが推察される。

表8から行動に関して、7月から10月にかけて行動数が徐々に減少（7月：120回，9月：90回，10月：70回）しており、繰り返し読み聞かせることで子どもの集中を促進しているのではないかと推察される。特に9月において「手遊び」（7月：14.2%，9月：7.8%，10月：8.6%）が大きく減少している。物語の主人公と同じように夏休みを経験したことから、具体的にイメージを形成することができ、集中して読み聞かせを聞くことができるようになったと推察される。

表9 「食べ物と健康」の時期ごとの反応数

食べ物と健康													
	7月(回)	%	9月(回)	%	10月(回)	%		7月(回)	%	9月(回)	%	10月(回)	%
笑い	8	11.8	10	11.4	17	8.3	指差し	1	0.9	3	2.6	10	11.6
否定	0	0.0	1	1.1	0	0.0	立つ	0	0.0	1	0.9	5	5.8
絵へのコメント	2	2.9	3	3.4	23	11.3	移動	12	11.2	8	6.8	16	18.6
お話へのコメント	17	25.0	42	47.7	92	45.1	座り方を変える	47	43.9	60	51.3	19	22.1
疑問	12	17.6	3	3.4	3	1.5	手遊び	18	16.8	7	6.0	8	9.3
推測・先取り	2	2.9	3	3.4	14	6.9	他児にちょっかいを出す	24	22.4	26	22.2	17	19.8
経験	5	7.4	8	9.1	6	2.9	音を立てる	5	4.7	12	10.3	11	12.8
復唱	11	16.2	3	3.4	22	10.8							
読み手に対する発語	2	2.9	6	6.8	12	5.9							
他児に対する発語	1	1.5	7	8.0	13	6.4							
読後の発語	8	11.8	2	2.3	2	1.0							
合計	68	100.0	88	100.0	204	100.0	合計	107	100.0	117	100.0	86	100.0

表9から発話に関して、「お話へのコメント」(7月:25.0%, 9月:47.7%, 10月:45.1%)が多く出現し、理解しようとしている姿は推察されるものの、自身の感情や体験・経験と結びつけながら楽しむ様子はあまり見られなかった。絵本の内容に似た経験や体験が乏しく、子どもたちが自由に想像して考えたりイメージしたりする隙間が少ないことが影響しているのではないかと推察される。また、場面ごとに反応は示しつつも、静かな時間が多く、読み終わりでは保育室内が静まり返っていた。発話に関しては「うんち!」、「おしっこ!」と物語の中の特定の言葉を繰り返し、笑う姿が見られた。しかし、目に見えず具体的にイメージすることが難しい内容であるため、自身の経験からの想起というよりは、基礎知識や目の前の絵本の一場面からの情報による断片的な想起がほとんどであった。

表9から行動に関して、澤田ら(2009)の研究において「日常生活や遊びの中でよく使う手足を通して、自分のからだを使ってからだを認識していく」と述べられている。この絵本では健康を題材に、体の仕組みや栄養素について述べているため、子どもたちは「手遊び」(7月:16.8%, 9月:6.0%, 10月:9.3%)や「他児にちょっかいを出す」(7月:22.4%, 9月:22.2%, 10月:19.8%)ことを通して、絵本の内容を理解しようとしたのではないかと推察される。

表10 「食材そのもの」の時期ごとの反応数

食材そのもの													
	7月(回)	%	9月(回)	%	10月(回)	%		7月(回)	%	9月(回)	%	10月(回)	%
笑い	2	3.4	7	9.2	7	6.6	指差し	21	16.2	20	16.0	21	18.4
否定	0	0.0	0	0.0	1	0.9	立つ	2	1.5	2	1.6	3	2.6
絵へのコメント	19	32.8	18	23.7	32	30.2	移動	16	12.3	19	15.2	22	19.3
お話へのコメント	4	6.9	9	11.8	18	17.0	座り方を変える	35	26.9	49	39.2	25	21.9
疑問	3	5.2	5	6.6	4	3.8	手遊び	19	14.6	11	8.8	11	9.6
推測・先取り	0	0.0	0	0.0	2	1.9	他児にちょっかいを出す	29	22.3	15	12.0	28	24.6
経験	7	12.1	14	18.4	6	5.7	音を立てる	8	6.2	9	7.2	4	3.5
復唱	5	8.6	6	7.9	16	15.1							
読み手に対する発語	4	6.9	8	10.5	3	2.8							
他児に対する発語	7	12.1	1	1.3	12	11.3							
読後の発語	7	12.1	8	10.5	5	4.7							
合計	58	100.0	76	100.0	106	100.0	合計	130	100.0	125	100	114	100.0

表10から発話に関して、「絵へのコメント」(7月:32.8%, 9月:23.7%, 10月:30.2%)が多く出現し、物語の内容を理解しようとしている姿が推察された。しかし、「食べ物と健康」とは異なり、自身の経験・体験と結びつけながら楽しむ様子が「食材そのもの」では見受けられた。

表10から行動に関して、「他児にちょっかいを出す」(7月:22.3%, 9月:12.0%, 10月:

24.6%) が7月から10月にかけて比較的多く出現していることから、他児との関わり合いの中で絵本を楽しみ、絵本の内容が子どもの心にとどまったことが推察される。

表11 「食を通じた人間関係・文化や習慣」の時期ごとの反応数

食を通じた人間関係 文化や習慣	7月(回)			9月(回)			10月(回)			7月(回)			9月(回)			10月(回)		
	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%	回数	%		
笑い	27	27.3	42	31.8	63	34.6	指差し	3	3.6	3	2.9	5	9.4					
否定	3	3.0	0	0.0	4	2.2	立つ	5	6.0	1	1.0	7	13.2					
絵へのコメント	13	13.1	22	16.7	14	7.7	移動	18	21.4	25	24.3	11	20.8					
お話へのコメント	12	12.1	22	16.7	53	29.1	座り方を変える	27	32.1	38	36.9	14	26.4					
疑問	6	6.1	5	3.8	2	1.1	手遊び	9	10.7	9	8.7	0	0.0					
推測・先取り	1	1.0	1	0.8	2	1.1	他児にちょっかいを出す	18	21.4	23	22.3	15	28.3					
経験	5	5.1	2	1.5	4	2.2	音を立てる	4	4.8	4	3.9	1	1.9					
復唱	8	8.1	12	9.1	29	15.9												
読み手に対する発話	2	2.0	7	5.3	5	2.7												
他児に対する発話	3	3.0	5	3.8	6	3.3												
読後の発話	19	19.2	14	10.6	0	0.0												
合計	99	100.0	132	100.0	182	100.0	合計	84	100.0	103	100.0	53	100.0					

表11から発話に関して、「笑い」（7月：27.3%，9月：31.8%，10月：34.6%）や「お話へのコメント」（7月：12.1%，9月：16.7%，10月：29.1%）は7月から10月にかけて増加し、「疑問」（7月：6.1%，9月：3.8%，10月：1.1%）、「読後の発話」（7月：19.2%，9月：10.6%，10月：0.0%）が減少し、「食材と人間との関わり・栽培」と似た変化をしていることが示唆された。古市（2014）は自身の研究において、リズムカルな調子の言葉を子どもはすぐに覚えて使うことを明らかにしており、それは言葉を記憶するだけでなく、仲間と意味を共有し、仲間同士の確認ができる楽しさに由来していると述べている。日常生活や園生活に即した深い経験と繰り返し行われた読み聞かせから、心中のイメージと言葉のリズム感が繋がったのではないかと推察される。また、「復唱」（7月：8.1%，9月：9.1%，10月：15.9%）も読み聞かせを繰り返すうちに増加していることから、1回の読み聞かせでは気付くことができなかった絵本の言葉の面白さに気付いていることが示唆された。使用した4冊の絵本の中では最も反応が良く、「おいしそう！」と自分の感情を素直に表現した発話が多く出現した。また、他の3冊と比較して「笑い声」を上げる子どもが多く、磯部・池田（2002）や古屋ら（2000）の言う「代理情動反応」が多く認められ、深い経験から具体的なイメージは、物語の登場人物に対する親しみの気持ちを子どもたちに与える可能性がある。行動においては、「音を立てる」（7月：32.1%，9月：36.9%，10月：28.3%）等大きな動きを伴う反応が多かったが、古市（2012）でも述べられているように、具体的なイメージや印象を残した絵本の内容が子どもに与えた影響ではないかと推察される。

表11から行動に関して、「他児にちょっかいを出す」が多く出現しており、他児と関わり合う中で絵本を楽しんでいること、「座り方を変える」が次第に減少しており、絵本に意識が向き、集中して読み聞かせを聞いていることが示唆された。また、「他児にちょっかいを出す」の割合が最も多くなったのが10月であることから、読み聞かせが他児との関わり合いに影響するには複数回読み聞かせを行い、共通理解を生むことが必要であると推察される。

表8から表11の分析を踏まえると、発話に関して、「食材と人間との関わり・栽培」や「食を通じた人間関係・文化や習慣」の内容の絵本では、「経験」や「笑い」など聞き手自身の経験や体験、感情が元となる発話が多く出現し、「食べ物と健康」や「食材そのもの」の内容の

絵本では、「絵へのコメント」、「お話へのコメント」など物語の内容を理解しようとしている発話が多く出現した。行動に関しては、発話と同様に実体験との関連が大きく影響していることが示唆された。

### 3. 年齢と読み聞かせを行った時期と回数との関係

最後に、年齢と読み聞かせを行った時期と回数のクロス集計を踏まえて分析と検討を行う。表の左側が発話、右側が行動の表となっている。

表12 4歳児に読み聞かせを行った時期ごとの反応数

4歳児													
発話	7月(回)	%	9月(回)	%	10月(回)	%	行動	7月(回)	%	9月(回)	%	10月(回)	%
笑い	24	17.4	33	20.9	71	20.2	指差し	14	5.8	21	9.7	13	8.7
否定	0	0.0	1	0.6	6	1.7	立つ	3	1.2	0	0.0	15	10.1
絵へのコメント	12	8.7	15	9.5	34	9.7	移動	26	10.8	29	13.4	21	14.1
お話へのコメント	20	14.5	34	21.5	113	32.2	座り方を変える	93	38.6	102	47.2	54	36.2
疑問	20	14.5	7	4.4	7	2.0	手遊び	34	14.1	7	3.2	11	7.4
推測・先取り	0	0.0	0	0.0	13	3.7	他児にちよっかいを出す	50	20.7	29	13.4	22	14.8
経験	13	9.4	15	9.5	14	4.0	音を立てる	21	8.7	28	13.0	13	8.7
復唱	20	14.5	14	8.9	43	12.3							
読み手に対する発話	5	3.6	20	12.7	22	6.3							
他児に対する発話	4	2.9	3	1.9	24	6.8							
読後の発話	20	14.5	16	10.1	4	1.1							
合計	138	100.0	158	100.0	351	100.0	合計	241	100.0	216	100.0	149	100.0

表12から発話に関して、「笑い」（7月：17.4%，9月：20.9%，10月：20.2%）や「お話へのコメント」（7月：14.5%，9月：21.5%，10月：32.2%）が多く出現した。古屋ら（2000）の研究において、子どもたちが登場人物に対する認知的理解を行っている一つの指標となることが述べられており、観察においても絵本の絵やお話の内容に関する発話が増加したことから、繰り返し読み聞かせを行うことで、内容理解が深まっていることが推察される。以上の事から、4歳児の発話を時期ごとに比較すると、読み聞かせ時の発話から、読み聞かせを行った回数によって示す反応に差があり、子どもが注目する対象の変化を推察することができる。

表12から行動に関して、すべての観察を通して「座り方を変える」（7月：38.6%，9月：47.2%，10月：36.2%）が最も多く、座席形態が読み聞かせ時の4歳児に与える影響の大きさが示唆された。

表13 5歳児に読み聞かせを行った時期ごとの反応数

5歳児													
発話	7月(回)	%	9月(回)	%	10月(回)	%	行動	7月(回)	%	9月(回)	%	10月(回)	%
笑い	15	10.5	32	17.6	41	16.3	指差し	14	7.0	12	5.5	25	14.4
否定	3	2.1	0	0.0	0	0.0	立つ	4	2.0	6	2.7	2	1.1
絵へのコメント	30	21.0	35	19.2	50	19.9	移動	41	20.5	32	14.6	46	26.4
お話へのコメント	18	12.6	43	23.6	68	27.1	座り方を変える	58	29.0	87	39.7	27	15.5
疑問	8	5.6	7	3.8	7	2.8	手遊び	29	14.5	27	12.3	14	8.0
推測・先取り	4	2.8	4	2.2	5	2.0	他児にちよっかいを出す	51	25.5	46	21.0	53	30.5
経験	15	10.5	15	8.2	14	5.6	音を立てる	3	1.5	9	4.1	7	4.0
復唱	9	6.3	9	4.9	41	16.3							
読み手に対する発話	7	4.9	12	6.6	7	2.8							
他児に対する発話	9	6.3	11	6.0	13	5.2							
読後の発話	25	17.5	14	7.7	5	2.0							
合計	143	100.0	182	100.0	251	100.0	合計	200	100	219	100.0	174	100.0

表13から発話に関して、4歳児と同様に読み聞かせを繰り返すことで発話数が増加（7月：143回，9月：182回，10月：251回）しているが、4歳児よりも全体の発話数は少ない。これは、高橋・徳淵（1994）の研究によって「5歳後半になると、絵本のストーリー展開を楽しみながら、個別の言動については集団の読み聞かせのマナーを習得しつつある」ことが示唆されており、4歳児との違いと捉えられると推察される。以上のことから、5歳児の発話を時期ごとに比較すると、読み聞かせ時の発話からは、4歳児と同様に読み聞かせ時に子どもが注目する対象の移り変わりを読みとれることが示唆された。また、全体的に見ると5歳児が読み聞かせ時のマナーを習得しつつあることがうかがえ、「ルールのある遊びを、ルールを守りながら行える」という5歳児の発達段階が明示された。

表13から行動に関して、4歳児よりも行動数が多かった（7月：200回，9月：219回，10月：174回）。これは、4歳児よりも栽培や食卓等様々な経験をしていることが明確なイメージの構築に影響し、表現に繋がったのではないかと推察される。以上のことから、5歳児の時期ごとの行動を時期ごとに比較すると、読み聞かせ時における行動は、常に減少するわけではなく、絵本の内容理解ができることで、行動数が増え、その後読み聞かせ時のマナーを考えて行動数が減少するという流れがあることが示唆された。

#### IV 総合考察

今回の研究ではF幼稚園の4歳児と5歳児を対象に、絵本読み場面の断続的調査から、絵本の内容が子どもにどのように影響するのかを明らかにするため、4歳と5歳児における読み聞かせ場面の発話と行動を年齢、絵本の内容、読み聞かせを行う時期と回数のクロス集計から相違を分析し、検討を行った結果、子どもに与える影響に違いがあることが示唆された。以下に「絵本の内容」、「年齢」、「読み聞かせを行う時期や回数」の3つの観点から絵本が保育の中でどのように活用できるかを考察する。

##### 1. 絵本の内容による子どもの反応の違い

使用絵本②「食べ物と健康」や③「食材そのもの」の様な絵本においては、物語の内容は理解していても自分の気持ちが表現しにくいことが示された。また、使用絵本①「食材と人間との関わり・栽培」や②「食を通じた人間関係・文化や習慣」の様な絵本においては、話に興味を惹かれ自分の気持ちを表現しやすいことが示された。

「食べ物と健康」や「食材そのもの」に注目した絵本に関して井桁（2003）は、身体内の器官を認識するようになるのは9歳頃で、ものの身体内における変化が理解できるのは11歳頃であると述べていることから、幼児期において器官の働きは十分に理解できないことが推察される。栄養に関して鈴木（2005）の研究において、「ビタミン」、「エネルギー」等の栄養を子どもが知っていると思うと回答した割合は全体的に低いことが示されている。しかし鈴木（2005）が、調理経験が豊富な子どもほどそれぞれの栄養素を認識している傾向が認められたと明示していることから、栄養そのものは身近な題材である反面、実生活と絡めて連想がしにくいという特徴があるが、調理経験から豆腐や醤油等具体的なものとは結びつけやすいことが示唆された。

「食材と人間との関わり・栽培」や「食を通じた人間関係・文化や習慣」に注目した絵本の絵本に関して鈴木（2005）は、幼児が調理に親しみを持っていることを示しており、経験が深く日常的に行われるため、家族と共に食べる楽しさを連想し、具体的にイメージできたのではなかろうか。また、外山（2009）の研究において、「生物現象に関する子どもの理解には、経験による相違が認められている」と明示されており、日常的に栽培を行っている園と行っていない園とでは、過去の栽培経験に基づいた事實的知識の取得に差が生じたことが示唆されていた。これらのことから、栽培は園生活の中で行われているが、日常的に行われる食卓や調理と比較すると、具体的なイメージに繋がりにくいことが推察される。

以上のことから、具体的な内容や経験した内容の絵本は子どもの興味が惹かれやすいことが示唆された。また、使用絵本②「食べ物と健康」のように事実に基づいた説明文の様な特徴をもつ絵本に対して、子どもたちは内容を場面ごとに捉えており、「このあとこうなるよ」と先取りの発話が見られ、物語の内容を整理している姿が示唆された。大橋（2016）の研究において、保育者の具体的な活動の援助として、導入ではイメージを持つことだけでなく、経験を整理し深く把握することも重要であると述べている。また、山岸・藤沢・横須（2005）の研究において「絵本の使用により、今まで未知・恐怖だった手術やCAPDについて心の準備をすること、自分事として捉え受け止めながら望むことができた」と明示されていることから、活動の導入としての活用法も示唆された。

## 2. 年齢による子どもの反応の違い

4歳児は、座る位置によって集中しているか否かが分かれ、座席形態による影響が大きく、手を叩いたり足を鳴らしたりと音を立てる姿も目立った。また、読み聞かせを聞いたときに抱いた気持ちを即自的に表現する特徴がみられた。絵本の主軸に囚われないため、1回目の観察では「私4個見つけた」と話の主軸から逸れた発話が目立ったが、3回目の読み聞かせでは「お日様の味ってどんな味？」と話の内容を深める発話が出現したことから、読み聞かせを繰り返すことで、絵本に対する内容理解が深まっていることが示唆された。これらの事から、4歳児に関しては、座る位置や座席形態に配慮することで集中力の向上を図ることができるのではなかろうか。また、年少の子どもほど、内容を理解するためには繰り返し読み聞かせを行うことも必要になるのかもしれない。

5歳児は、4歳児よりも集中力が高く、絵本の内容を考えてから発するため、絵本の主軸から外れた発話や音を立てる等周囲の集中を妨げる行動も少なく、読み聞かせ時のマナーを理解している姿が示唆された。また、絵本の内容と自身の経験とを結びつけたり、「鬼がいるから、鬼公園だ」と根拠や理由と共に自分の意見を話したりする姿が見られた。周囲の他児とも関わり合いながら読み聞かせを楽しむ姿が4歳児よりも目立ったことから、絵本の内容から自分の経験を想起し発話に表すだけでなく、他児の想起の発話も聞き、様々な視点や経験を交えながら物語を楽しんでいることが示唆された。これらのことから、5歳児に経験を踏まえた内容の絵本の読み聞かせることは、より深い内容理解に繋がると推察される。

以上のことから、発話には4歳児と5歳児の園生活や日常生活での差や経験を想起する能力の差等の発達段階の違いが、行動には座り方による集中力の維持能力、周囲の友達との関係性

や読み聞かせ時のマナーを習得しているか等の発達段階の違いが影響していることが示唆された。

### 3. 読み聞かせを行う時期や回数による反応の違い

絵本の内容によって反応は様々であったが、読み聞かせの回数を重ねる度に物語の内容理解が深まっている姿が、発話や行動から推察された。また、経験が豊富で具体的にイメージができる絵本においては1回の読み聞かせでも内容に理解を示す姿が見られたが、回数を重ねるごとに更に深まったことから、物語理解に対する個人差が影響しているのではないかと推察される。これらのことから、1回の読み聞かせだけでは絵本の内容理解は十分ではなく、複数回読み聞かせを行うことで、絵本の内容理解を促し、子どもの共感を生むことができるのではなかろうか。

以上の結果から、5歳児はイメージしにくい内容の絵本であっても、絵本の言葉や絵を手がかりにしながらか自身の経験と結び付けて理解できるようになることが明示された。このことは、保育者が年齢に応じて絵本を選ぶ際の目安の一つとなるだろう。一方で、4歳児もイメージしにくい内容の絵本であっても繰り返し読むことで理解を深められることが示唆され、対象年齢に囚われず、幅広い絵本の選定に繋げられる可能性が示された。さらに、4歳児・5歳児両方とも説明的な絵本を保育活動の導入として使用することで、これからの活動の整理ができるだけでなく、活動後、絵本の内容と自身の経験を結び付けた理解につながる可能性が示された。

## V 今後の課題

本研究では、絵本の内容の違いによる子どもの反応の差を見るために、保育者の絵本の読み方や条件などを統制した。しかし、読み方以外の保育室内の環境や子どもの園生活以外における生活背景の違いによる反応の差も見られたことを鑑みると、今後は読み方だけでなく環境も統制した場合や、園生活以外における生活背景も考慮して検討していくことも必要であろう。また、コロナウイルスの関係で読み聞かせ中はマスクを着用していたため、反応した個人を区別することができなかった。個人を区別したより細かい検討することで、性別の差や個人の生活背景等を加味した分析が行えるのではなかろうか。

## 謝 辞

本研究に快くご協力下さいましたF幼稚園の先生方と子どもたちに心よりお礼を申し上げます。

## 本研究使用絵本

- ①市川里美作 (2013) 『ハナちゃんのトマト』 BL出版株式会社
- ②かこさとし作 (1976) 『かこさとしからだの本2 たべもののたび』 童心社
- ③松本春野文・絵 辰巳芳子監修 (2020) 『まほうのおまめだいずのたび』 文藝春秋
- ④谷口國博文 村上康成絵 (2007) 『うちのコロッケ』 世界文化社

## 引用文献

- 古市久子 (2012) 「絵本がもつリズム性がこどもに与える教育的意味」愛知東邦大学 東邦学誌, 41, pp.109-125
- 古市久子 (2014) 「こどもの動きを引き出すオノマトベ絵本」愛知東邦大学, 東邦学誌, 43, pp.87-104
- 古屋喜美代・高野久美子・伊藤良子・市川奈緒子 (2000) 「絵本読み場面における1歳児の情動の表出と理解」発達心理学研究, 11, pp.23-33
- 原坂一郎 (1997) 「幼児と笑い」笑い学研究, pp.4-10
- 井桁重乃 (2003) 「幼児期における身体内イメージの発達 (2)」東京成徳大学研究紀要, 10, pp.1-11
- 磯部陽子・池田由紀江 (2002) 「絵本読み場面における幼児の情動認知の発達」, 心身障害学研究, 26, pp.33-44
- 厚生労働省 (2017) 保育所書育指針 フレーベル館
- 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説 フレーベル館
- 松村敦・杉七瀬・宇陀則彦 (2008) 「読み聞かせ時の反応に着目した絵本に対する子どもの好みの取得方法に関する検討」, 日本教育工学会論文誌, 32, pp.125-128
- 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 文部科学省「食育って何?」<https://www.mext.go.jp/syokuiku/what/index.html>  
(2022年4月25日最終確認)
- 森光彩・藤原正光 (2011) 「集団場面での紙芝居の読み聞かせにおける幼児の視聴態度に関する研究－視聴座席形態・年齢要因・視聴時間からの検討－」文教大学教育学部, 教育学部紀要, 45, pp.39-47
- 内閣府食育推進室「食育の推進に向けて～食育基本法が制定されました～」内閣府食品安全委員会事務局リスクコミュニケーション室 文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室 農林水産省消費・安全局消費者情報官  
[https://www.pref.chiba.lg.jp/annou/shingikai/syokuiku/dai1kai/documents/sankousiryou5\\_3\\_1.pdf](https://www.pref.chiba.lg.jp/annou/shingikai/syokuiku/dai1kai/documents/sankousiryou5_3_1.pdf) (2022年4月25日最終確認)
- 中楯茉奈実・山内淳子 (2016) 「熟達した保育者の絵本の読み聞かせの特徴－保育者志望の学生の読み聞かせとの比較を通して－」, 山梨学院短期大学研究紀要, 36, pp.74-87
- 並木真理子 (2012) 「幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響」, 保育学研究, 50, pp.165-179
- 農林水産省 (2005) 「食育基本法」(法律第63号)
- 農林水産省「食育とは?」  
[https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/wpaper/h30\\_minna/html/part1.html](https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/wpaper/h30_minna/html/part1.html)  
(2022年4月25日最終確認)
- 野地潤家 (1987) 「小学校児童の絵本読書指導論」共文社, pp.66-68
- 大橋麻里子 (2016) 「幼児の生活画の活動における保育者の援助に関する研究－導入時の援助の方略とその意図の分析を通して－」美術教育学, 美術科教育学会誌, 37, pp.161-177
- 尾崎恭子 (2005) 「幼児の精神発達と絵本」中国学園紀要, 4, pp.61-67

- 佐藤公代 (2004) 「子どもの発達と絵本」愛媛大学教育学部紀要, 51, pp.29-34
- 澤田節子・古市久子・八幡博繁・加藤敦子・山崎明日香 (2009) 「幼児が知っている『からだ』」東邦学誌, 38, pp.69-90
- 鈴木洋子 (2005) 「調理参加を主軸にした食育の推進－家庭における幼児の調理参加状況からの検討－」奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 14, pp.21-27
- 高橋登・徳淵美紀 (1994) 「集団での絵本のよみきかせ場面におけるこども達の相互作用について」日本教育心理学会総会発表論文集, 36, p.139
- 堤千代子・森恵子・永島倫子・菅淑江 (2008) 「絵本の中の食育」中国学園紀要, 7, pp.177-188
- 友定啓子 (1993) 「幼児の笑いと発達」勁草書房
- 外山紀子 (2009) 「作物栽培の実践と植物に関する幼児の生物学的理解」教育心理学研究, 57, pp.491-502
- 山岸敏身・藤沢佳子・横須真由美 (2005) 「絵本を使ったCAPD導入の準備」日本小児腎臓病学会雑誌, 18, pp.53-54
- 山本政人 (2008) 「幼児における因果関係と語り」学習院大学文学部, 研究年報, pp.211-226
- 横山真貴子・水野千具沙 (2008) 「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義－5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から－」, 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター 研究紀要, 17, pp.41-51
- 弓野憲一・岩岡佳 (1992) 「幼児期における物語理解の発達」静岡大学教育学部, 静岡大学教育学部研究報告, 人文・社会科学篇, 42, pp.189-197